

3月12日尼崎市立中央公民館3階大ホールにて、第10回学習発表会が開催されました。会場は賑やかに開催されました。会場の設営や、展示物の飾り等協力し、お客様のお迎え準備も整い、いざ始まりです。舞台上上がる方は勿論、ゲストの方や多数のお客様がお見えになり、楽しい時間への期待が膨らみます。牡丹グループ、梅グループ、バラグループの日本語教室で日々勉強されている生徒さんも、今日の為に各自テーマを決め研鑽を積んできました。



舞台発表の様子

でいよいよ開催。まず今回司会を担当する牡丹グループは「日常会話、こんな人一人が日々の暮らしの中、お店や友達と又、お隣さんとのこんな事やあんな事、アクセントの違いなど、日常の様子を披露し、暮らしのふりかざりに浮かぶ様でした。次に梅グループは「中国と日本の違い」と題して7組に分かれ、風習や生活環境、言語、国土にまで亘る違いを掘り下げて披露しました。各々会話調で難しい日本語の例えなども取り入れ、会場の皆さんに分かり易く爆笑も交え話していただきました。

そして3番目、バラグループは「それぞれの想いを語るシンポジウム」と題するトークで、中国での養父母との生活や文化大革命を経験した事、現地でのお母様との思い出、帰国からの苦労や驚き、楽しみ日本のおもてなしの心、お父様との思い出等、様々なお話を聞かせて下さいました。発表が終了、出演の皆さんが舞台上上がり、日本語の歌を披露(2曲)し、そしておわりのことばで本日の

会の閉会でした。皆さんが頑張つて挑戦している姿に大感激の1日でした。(雲北伸子)

梅グループを2つに分けました

牡丹グループよりの移籍と新参加による学習者増を受けて、今年度梅グループは梅1組梅2組として新たにスタートを切りました。

スタッフも新たに二名増員され、組の運営をこなしています。スタッフが増えたことにより、スタツフが増えたことにより、日本語独特の言い回しである撥音便・促音便、擬音語・擬態語などの使い方や使い分け、意味などを詳しく説明でき、さらにアルファベットの練習なども取り入れるようになりました。学習者にとっては疑問点、わからない言葉、事柄がすぐに質問できるのが好評のようです。作文力やテキスト本文の読解力も深まって、それが自信にもつながっています。

また折りに触れて合同授業などを取り入れることも視野にいれ、展開を図っていきます。新体制となった梅グループは

学習者の更なる意欲の向上と地域への発信力アップを願い、スタツフ一同自己研鑽と教材研究に励み、力を合わせて取り組んでいきます。(山本育子)

第8回コスモスの会

の総会を開催

6月4日(火) 15時15分から尼崎市立中央北生涯学習プラザで、2019年度コスモスの会総会を開催しました。昨年度の事業実績と会計報告、今年度の事業計画案と予算案を審議し、了承を得ました。

編集後記

令和時代の幕開けにより、昭和がますます遠ざかります。戦争体験者も少なくなり、中国残留日本人問題が一層風化しています。平和を願う私たちは、時代が変わろうと中国残留日本人問題は今でも私たちに突き付けられた問題として考えなければなりません。このようなスタンスで本号もお届けします。皆さまが「かけはし」を通して、少しでも中国残留日本人問題をお考えいただければ幸いです。(丁)

あんな話こんな話

えだまめ

中国では、さやの表面に毛が生えていることから、毛豆と呼ばれています。

日本では、さやに入つたままの豆を枝つきで茹でることから、枝豆と呼ばれています。それぞれ違う角度から観察したのが窺えるでしょう。



文・画：空海

在中国、毛豆因其豆莢表面长毛被称作毛豆。而在日本、豆类连枝烹煮，所以得名枝豆。可以说两者源于各自从不同角度观察。

ボランティア研修会
大阪自興会元理事長
徳田勝彦さんの講演

1942年大阪で生まれた徳田さんは半年後に家族で大阪特設開拓団として満州に渡り、内蒙古の興安北省札蘭屯区布徳サフ旗に入植しました。戦後は技術者として留用された父と共に8年間満州に残されました。帰国後は大阪自興会に加わり中国残留孤児の身元引受けなどの支援に携わってこられました。これらの体験を語っていただきました。

父が話した満州のこと
沖繩出身だった父が53年に舞鶴に引揚げた時、沖繩タイムズの記者に話した記事によると、入植して農業経営がやると軌道に乗り、希望が見え始めた頃、敗戦を知らされ、一家7名は他の家族30人程と着の身着のまま徒歩でチチハルを目指して避難した。途中、病人や子供はバタバタと倒れ、さらに銃で武装した20名ほどの集団に襲われ、持ち物や若い人妻たちを連れ去られた。残った人たちに日本へ帰る望みはなく、迷っている所へ蒙古人に救われ、



講演する徳田さん

人の引揚げがあると知り、次女を迎えに行ったが、会うことはできなかった。
鍛冶屋職人だった父と共に中国に残されたチチハルへ着くと父は鍛冶屋の技術を持っていったのを断念し、遙か遠いロシア沿海州に近い鶏西県鉱務局機械廠で働くことになった。

阿倫旗という部落に行った。徳田さんの家族は3人と4人に別れ、母(マツさん)と次女(節子さん)、それに乳飲み子の3人は呉損登という蒙古人に引き取られた。その後母は46年2月に病死、医者に引取られた乳飲み子も死んだ。父は仕事探しに兄、長女と徳田さん連れて札蘭屯に出た。7月になり日本



徳田さんの手には大きな怪我の痕がある。収容所の小学校3年か4年生の頃だった。蒋介石(国民党)と八路軍(中国共産党)の戦争が、始まった。国民党軍の空襲が頻りにあり、警報で逃げるとき机の角で打撲し、それを放置していたら腐り、切断しなければならぬところを日本人医師が手術してくれた。

当時、日本語のできない人への日本語教育はなく、父は古本屋で日本語の会話集を買ってきて姉に教えていた。ところがその後、父の努力の甲斐も無く姉は結婚式の前夜に自殺してしまった。どうしても日本の社会に馴染めなかったのだ。姉を助けることができ

た。機械廠は軍が管理する施設だった。この地の戦闘で関東軍はたくさんの爆弾を落とっていた。ここでの仕事はその爆弾を日本人が集め、火薬を外し、鉄を溶かして砲弾を作ることだった。兄と姉はその爆弾回収作業中に爆死した。帰国してから姉を失った53年に帰国が可能となり、帰国に際し中国政府からねざらいつとして要望を聞かれた父は行方がわからぬ次姉のことを訴えた。すぐに次姉を探し出してくれたが、姉は日本語が全然わからず、現地に馴染み帰国したいという気持ちもなかった。中国政府の働きかけで次姉もいっしょに帰国することになり、53年4月徳田さんの家族は舞鶴に着いた。

当時、日本語のできない人への日本語教育はなく、父は古本屋で日本語の会話集を買ってきて姉に教えていた。ところがその後、父の努力の甲斐も無く姉は結婚式の前夜に自殺してしまった。どうしても日本の社会に馴染めなかったのだ。姉を助けることができず、本当に残念だった。徳田さんの手には大きな怪我の痕がある。収容所の小学校3年か4年生の頃だった。蒋介石(国民党)と八路軍(中国共産党)の戦争が、始まった。国民党軍の空襲が頻りにあり、警報で逃げるとき机の角で打撲し、それを放置していたら腐り、切断しなければならぬところを日本人医師が手術してくれた。沖繩に帰る予定が大阪に舞鶴に着いた時、徳田さんの家族は沖繩に帰ることになっていた。ところが大阪の開拓団出身ということで大阪自興会(引揚者の支援団体)が迎えに来ていた。父は何を考えたかかわ

らないが、大阪に留まることになった。その後、大阪市淀川区加島の引揚者寮に2〜3ヶ月いた。当時食べ物が少なく、徳田さんの体は栄養失調状態が続いていた。さらに手術で指の骨を切り取ったため、体力を消耗し、病気に対する抵抗力がなくなっていた。引揚げてから肺結核になっていることが分り、約2年間入院した。そういう状態の中で大阪自興会の支援を受けた。その後、父が亡くなったので、その代わりに自興会に入った。大阪自興会に参加して徳田さんは、自興会になんとなく入ったが、そこから深く活動するようになっていった。理事長もやり、何組かの中国帰国者の身元保証人を引き受けた。徳田さんは「父や兄・姉たちの苦勞を見てきたが、私自身はそんなに苦勞はしていない。だからできるだけ、みなさんの役に立てたい」と思ってきた。私の中に中国・満州での体験しさがあつたと思つ」と述べられた。(石打謹也)

かけはし

中国残留日本人支援団体 尼崎日本語教室 コスモスの会だより 第17号 2019.7.1

編集発行：コスモスの会広報部 〒661-0953 尼崎市東園田町4丁目152-16 TEL：06-6493-5563
コスモスの会ホームページ・URL=http://kosumosunokai.sakura.ne.jp/index.html FAX：06-6493-0817